



「打ち水」は歴史上いつごろから始まったのですか？



古代から中世にかけて「古今和歌集」、「千載集」、「草根集」に川や滝の涼しさ、夕立の後の爽やかさを詠んだ歌がみられますが、この中には「打ち水」はまだ登場していません。「打ち水」が始まったのは戦国から安土桃山時代ごろからです。この時代に「茶の湯」が成立しました。「茶の湯」では、礼儀作法としての「打ち水」が行われていました。そして、江戸時代には、「打ち水」が俳句に詠まれたり、浮世絵に描かれたり、涼の手段として普及していったと考えられます。



江戸時代の「打ち水」はどんな目的があったのですか？



江戸時代の道は現在のようにコンクリート舗装されていませんから「打ち水」目的には、夏の暑さを和らげることに加えて、道の土埃をはずめる効果がありました。それとお客様を招く時に玄関先や道に水を撒くことで心地よく迎える気持ちとお清めの意味などがあったと考えられます。

○水うてや蟬も雀もぬるる程（宝井其角）

○武士町や四角四面に水を蒔く（小林一茶）

などの俳句に江戸期の「打ち水」が表現されています。



最近「打ち水」をあまりしませんが、その訳は？



近代から現代に入り、生活の中に密着していた「打ち水」は徐々に姿を消していきました。その理由は、道路が舗装されとことで土埃の減少したこと。クーラーの普及に伴う窓を閉めた生活時間の増加したこと。高層住宅の普及に伴って「打ち水」の恩恵を受けない世帯の増加したこと。そんな理由が考えられます。それと地域のつながりが喪失していき、「打ち水」を町内住民で実施する意識が喪失されたなどの変化が背景にあると考えられます。



「打ち水」にはどんな効果がありますか？



浴衣を着て「打ち水」をすることで、浴衣姿を見て清涼感をもつことができます。実際の効果としては気温の低下や風の発生も報告されています。12～13時台の一斉に「打ち水」をしたあとに概ね1～2℃の気温低下が観測されました。「打ち水」の実施後、涼しく感じたと回答した人の割合が9割に達するとともに、風を感じたとの回答が8割に達しました。



「打ち水」のやりかたを教えてください。



「打ち水」で撒く水は水道水を使わないことです。雨水や二次利用水を使うというのが基本ルールです。以下に挙げるような水を使います。

お風呂・シャワーの残り水、エアコンの室外機から出る水、雨水、台所のすすぎの残り水、米のとぎ汁、二層式洗濯器のすすぎ水、雑巾がけのすすぎ水、子供用プールの残り水など。



どんな撒き方をしますか？



雨水やお風呂の残り湯、エアコンの室外機に たまった水などを容器に入れてひしゃくがなくとも、手でバシャバシャ撒いたり、じょうろやペットボトルで水を打ちます。

「打ち水」を打つのは路面だけでなく、ベランダ、壁、室外機の周りに撒きます。日向でも日陰でも撒けば効果あります。時期的には、朝夕の時間帯、道路からの照り返しがある日には昼間や日向の打ち水も効果的です。いろいろと試してみましょう。



「打ち水」をすると、なぜ涼しくなるんですか?



打ち水をすると、「気化熱」によって地面の熱が大気中に逃げていきます。「気化熱」とは、水が気体になるときに周囲から吸収する熱のことです。水が蒸発するためには熱が必要になります。その熱は、水が接しているもの（つまり、地面）から、うばっていきます。これが、打ち水によって涼しくなる理由です。



地面から熱を吸い取ると、なんで気温が下がるんでしょうか?



ヒートアイランドの原因のひとつは、都市の表面をアスファルト、コンクリート等が取り巻き、熱を蓄えてしまうことです。このため、都市の気温が上がってしまいます。

「打ち水」のねらいは、まさにこのアスファルト、コンクリート等の表面に水をまくことで、直接、表面温度を下げることです。とうぜん、地面が冷えれば、その場所の気温は低くなります。

さらに、気化熱は、水が接しているもの（つまり地面）から、たえず熱をうばって蒸発しようとししますので、地面がたえず濡れている場所の方が、そうでない場所より涼しいということになります。保水性の高い土や芝生の方がコンクリートよりも涼しいのはこの理由からです。